

あられたので、そこで学んだ。かやうなわけで、他の学校は始めから志望もせず、当時官学万能の思想が盛であつたが、私は全くそれから離れてゐた。

又しても波多野氏のことにかへるが、大隈侯邸を訪れたこの日は、氏の住家が赤坂に在つたので、電車がまだ無かつたため、赤坂から外濠に出て、神楽坂を上つて、三つの腕車があゝの急坂を右に左にうねり、鶴巻町の細いく道を行つて、侯邸に着いた事は全く夢裡の幻話のやうであるが、今だに忘れない。新陳隆替のはげしさ、その頃のもので、大学に残つてゐるものは、校舎も図書館も運動場も、今一つも認めない。

学生時代の想ひ出

竹 野 長 次

(大正三年卒)

私が早稲田大学の高等師範部に学んだのは明治四十四年から大正三年までである。時の部長は文学博士・藤井健次郎先生であつた。先生は帝大を出てからすぐ早稲田に來られ、早稲田から歐洲に留学された方で、高山樗牛の友人であつた。いつも教場で早稲田の野武士的精神を強調された。そして青年は遠大な志を持たねばならないことを説

き、「最初から教師になるなどといふちつぽい根性では駄目だ。まかりまちがつたら教師でもしようといふ位の量見でなくてはならない」とも言はれた。牛肉屋でクラス会を開いた事もあるが、先生も同席せられ、一つ鍋の肉をつき合ひ、酒を飲みながら、大いに酔つて語られたこともある。然し先生は私共が三年に進んだ大正二年の秋京都大学に就任された。それは時の総長沢柳博士の懇請によるものであつた。私共は僅かの金を出し合つて先生に花瓶を贈り、その贈呈の辞を私が書いたことを覚えてゐる。

漢文の先生には牧野藻洲、桂湖村、菊地晩香などお歴々の先生が揃つてゐて、正に花燎乱の觀を呈してゐたが、一番印象に残つてゐるのは松平康国先生である。先生はアメリカに遊学しながら漢文を勉強されたといはれた程の変つた人で、漢文の先生であり乍らバチエラー・オブ・ローズの肩書を持つて居られた。漢詩では一流の才筆を揮はれたことは過賞ではない。明治四十四年の秋頃であつたらうか、南北朝正閏問題といふが起つて、学界に大きな波紋を立て、当時の史学家が南朝正統論に、或は北朝正統論に、それぞれ別れて対立論争したことがある。この時松平先生は南朝正統論を真向から駁して、姉崎瀾風博士などと共に、吉野の遺跡を尋ねたり各地の講演会に出られた。そして教場でも南朝正統の理由を熱烈火を吐くが如き熱弁を以て語られたことがある。先生は容姿端麗で、いつも五つ紋の羽織に仙台平の袴を召して居られた。それに姓は松平で貴族的で

あるし、名は康国といふのであつたから、私共学生の間には専ら華族のおとし、風だらうといふ噂があつた。後に私が早稲田の教壇に立つやうになつてからの事だ。昭和三年の秋に先生のアシスタントとして、先生と二人で学生を連れて旅行に出かけたことがある。そして伊東温泉に宿つた夜、晩酌をくみながら、先生に臆面もなく学生時代の噂話をしたのであつた。すると先生は「私の家は久松家で先祖がやたらに人を切つたりしたものだから旗本にまでさげられて終つた。然し仙台の伊達侯などは私の家に正門からは這入れなかつた」と笑つて話された。(この時は酔にまかせて話がそれからそれへと移つて色々面白いこともあるが紙教に制限があるので割愛する)

国語では佐々醒雪、岡田正美、五十嵐力、尾上柴舟、保科孝一などの諸先生が独自の風格と学識とを以て教壇に立たれたが、永井一孝先生がこの分野の中核をなして居られた。先生の平家物語の講義は有名なもので、私は早稲田に来る前に、村の先輩から既に幾度も聞かされてゐた。先生からは竹取物語、土佐日記、徒然草、古事記などの講義を聞いてゐる間は、至極泰平無事であつたが、さて枕草子を教はる段になると、毎時間輪講をさせられたので、その下調べにひどく苦労したものだ。

歴史では日本歴史を吉田東伍博士から、東洋史を高桑駒吉先生から、それぞれ三年間教へられた。吉田博士は有賀長雄博士の著した「日本歴史」といふ上下二巻の約二千頁

以上の書物を土台に講義されたが、この教科書について先生は「著者でもこの書物に書いてあることを皆知つてゐる訳ではないが、然し或る何物かをつかんでゐる」と言はれたことがある。先生の授業はいつも午後で、それに教科書がある関係から、欠席する者が多かつた。先生は出欠簿をとり終へてから「頭数は少ないが返事だけは多御座んすなア」と言つて、少しもこだわらずに講義を始めたことを、嬉しくなつかしく想ひ出すのである。

大正元年の暮れ近い時であつた。私は四方舞の話を伺ひに、突然先生のお宅を尋ねたことがある。すると先生は、図書館で調べて、原稿を作つて来るやうに言はれた。それから再び先生を訪れると、「何の書物を見て書いたか」と問はれたから、これ／＼の書物を見たと言へると、カブリを振つて、それでは駄目だ。では私が話さうと言はれ、新聞の一段半ばかりの長さのものを空で述べられた。そして引用する漢文などは丁寧に文字まで教へて呉れた。かうした博学で記憶力の素晴らしい学者は今では求められない。最後に最も印象に残つてゐるのは島村抱月先生である。先生からはモービーの文学論を原書で教はつたのであつたが、それよりも教科書を離れての漫談に味ひがありくが、あつた。先生が「奈良より」「京都より」といふ立派な隨筆を書かれたのも私共を教へてをられた年の秋である。

私が学校に入学の手続をしての直後、重頼の若い教授が人力車で来られるのを見た。すると私を案内してゐた政経

の学生が「あれは永井柳太郎だ」といった。私はせいぜい廿二三才にしか見えない永井氏を見て「あれが有名な永井柳太郎氏か」と、奮起したことがある。

私は学校を出てから芝中学に就職し、大正六年に「徒然草新釈」を出版した。私は松本中学の卒業だが中学の五年の時、徒然草を服部といふ国語の先生から教はつた。先生は徒然草を全部誦誦して居られ、教場へは教科書を持たずに手ぶらで来られた。私も職を中学に奉じたからには、徒然草くらゐはどこで誰にどこの部分を尋ねられても明答が出来なくてはならないと考へたのが、この書物を書いた動機である。

大正の中期

佐々木八郎

(大正八年卒)

私が早稲田に学んだのは大正五年の春から同じ八年の夏にかけてである。夏といつたのは、当時の学制では早稲田の卒業期が七月になつてゐたからだ。その頃はまだ国文学の専攻科は大学の文科にはなく、もっぱら高等師範部に設置されてゐた。私が入学した頃の先生では、国文学を担任された方では、永井一孝、尾上八郎、岡田正美、佐々政

一、山口剛の諸先生、漢文は松平康国、牧野謙次郎、桂五十郎、菊地三九郎の諸先生であつた。それから、国語学は保科孝一先生、言語学は安藤正次先生が担当せられてゐた。五十嵐力先生には作文と修辭学、それに英語を教えられたわけである。

あの頃中学校の先生になるには文部省の、今から見ると随分厳しい無試験検定を受けなければならないのであつて、そのために文部省から指定された国文学の書目といふものは誠に雑多を極めたものと見えて、「伊勢」「源氏」「枕草紙」「万葉」「古今」「新古今」俳諧はもとよりのこと、で、「古事記」も「平家」も「徒然草」も、はては「大鏡」「増鏡」から、遡つては宣命・祝詞の如きに至るまで、よろづ何くれと古典文学ひとわたりは當つたものである。だから日本文学史といつたやうな、面を改めての文学史概観の購讀はなかつたが、かういふ多くの作品を通して、ぢかに本文に接して文学史の概要を自得させられることになつた。

散文学の大部分と国文法と有職故実——つまり韻文学を除く大方の分野は殆ど永井一孝先生の担任であつたが、先生からは一週数時間にわたつて三年有半の間随分いぢめ抜かれたもので、おかげで古典文学を正確に解読する力をつけていたといふことは今に有難く思つてゐる。文法といへば、当時の岡田正美先生はいはゆる大槻文法に激しい批判を加へた新しい科学的な文法を掲唱せられた楽楽主義の先